2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**カンジョウナワ行事と地域における伝承の変容**
キーワード	①民俗宗教、②カンジョウナワ行事、③民俗行事の保存・継承

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	サイレンジ　タクミ 西連寺　匠
配付時の所属先・職位等 （令和 7 年 4 月 1 日現在）	帝塚山大学　文学部　講師
現在の所属先・職位等	帝塚山大学　文学部　講師
プロフィール	帝塚山大学大学院で奈良のカンジョウナワ行事について研究を行いながら、2019 年から滋賀県愛荘町の愛荘町立歴史文化博物館に勤務。退職後、2022 年から帝塚山大学に入職、講師兼附属博物館学芸員として勤務。

1. 研究の概要

近畿地方ではカンジョウナワ行事と呼ばれる習俗が京都府・奈良県・滋賀県・三重県を中心に分布していることが知られている。これは 12 月～2 月頃に村境や川などに作り物を付けた綱を掛ける集落の行事で、道切り行事の一類型であると考察されている。

本研究ではカンジョウナワ行事の一種と類型されている国指定重要無形文化財の「江包（えっつみ）・大西のお綱祭り」（奈良県桜井市）について、昭和 27 年に記された絵巻資料の分析に加えて、伝承の記録と分析を行うことで、地域伝承の保存に寄与することを目指した。また、多くの研究者が調査に入っている同地域において、外的要因がどのような変化をもたらしているのかを検証した。

2. 研究の動機、目的

先行研究では、カンジョウナワ行事は道切行事の一種であると分析されてきた。しかし、申請者のこれまでの研究では、地域ごとに役割が異なり、その土地で必要な要素や日付が近い行事がカンジョウナワ行事に組み込まれていった結果、多様で複雑な行事になっていったことを明らかにしてきた。また、研究に伴う調査の過程において、研究者が調査地に入ったことで近隣地域の情報が入り交じり、伝承が変容している事例があることに着目した。伝承の変容は当然起こるものであるが、カンジョウナワ行事においては現代以降、特にこの傾向が強い。これは近代・現代の生活の急激な変化により、カンジョウナワ行事の意義が失われつつあることや、伝承が困難となっていることが大きな原因である。加えて、大正時代頃から多くの研究者が出入りしたことも原因の一つであると考えられる。

このように複雑化したカンジョウナワ行事の特質を明らかにするため、今回研究対象とした江包（えっつみ）・大西のお綱祭りは国学者・上田秋成の 1788 年頃の記録に登場する。その後しばらく時代があき、大正時代に奈良県で行われた民俗調査の報告書である『奈良県風俗誌』（1915 年）に織田村・纏向村の習俗として報告されている。また、辻本好孝『和州祭礼記』（昭和 19 年刊）では研究者の間で注目されているものとしての記載がある。以後、数多くの研究者や自治体によって調査が行われてきた。このように、古くから研究されてきたものの、

調査報告や事例の一部として取り扱われる程度で、お綱祭り自体の研究は少ない。また、帝塚山大学が所蔵する『江包の御綱絵巻』（作者不明・昭和 27 年製作）を検証したところ、絵では祭りを細かく描いているものの、説明文では現地では伝承されていない語彙を使用した記録が確認された。現地調査においても、多くの研究者が訪れることで過去の調査記録や研究者の分析がそのまま現地の伝承のように扱われている実態が見られた。

そこで本研究では、こうした江包・大西のお綱祭りに関する研究史と地域での伝承、地域の記録を比較し、研究者の成果と地域での伝承を分離して記録することで、複雑化したカンジョウナワ行事の本質に迫ることを目指した。これにより、地域社会や環境が変化し民俗行事の継承が困難となる現代で、無理のない民俗の継承方法の提案につながると考える。

3. 研究の結果

はじめに、『江包の御綱絵巻』の分析を行った。絵巻の作者による説明では祭りに登場する藁の作り物を「輪迦」「與仁」と記載している。輪迦（リンガ）・與仁（ヨニー）はサンスクリット語で男性器・女性器を表す。この特徴的な語彙は民俗学者・中山太郎の『土俗私考』（1926 年刊行）に見られ、文章もある程度の一致が認められる。中山太郎は昭和 22 年に死去しているため、作者である可能性は低く、中山太郎の研究に影響を受けた人物による作であることが考えられる。結果として作者の特定には至らなかったが、現地調査で江包地域に絵に心得がある人物が一時居住していたことが判明した。また、大西地域の調査でも元教員で書画が趣味である人物が居住していたことが確認された。（現在子孫が同地に居住している。）こうした人物が絵巻の作者である可能性が高いと考えられる。さらに調査の過程において、両地域で保存会を結成していたことが分かり、昭和時代の写真資料や住人による研究資料が数多く発見された。

次に研究史を調査した。大正 4 年に行われた奈良県内の民俗悉皆調査の報告書である『奈良県風俗誌』には巻向村・織田村の項目にお綱祭りの記載が見える。同調査は高田十郎によって主導されている。高田は大正時代に奈良県内の民俗を調査し、その内容を個人雑誌に掲載し出版していた人物である。高田が個人的に約 45 年間書き続けた手控え帳『奈良雑筆』は 382 巻に及び、現在子孫が所蔵している。『奈良雑筆』を調査したところ、当時の伝承が記録されており、中山太郎の記載なども含めると、大正時代頃から研究者に注目され始めたことが明らかになった。

また、絵巻や今回の調査で発見した写真資料などをもとに、現地での聞き取り調査を実施した。その結果、写真に写る人物や背景を含め、詳細な内容を聞き取ることができた。調査報告書は今後、現地と共有する予定である。なお、絵巻資料・写真資料の高精細画像についてはデータ版と冊子の両形態ですでに現地へ提供している。



▲帝塚山大学蔵「江包の御綱絵巻」（部分）



▲江包・大西の御綱（素戔嗚神社前）

4. 研究者としてのこれからの展望

昨今、多くの地域で民俗行事の伝承に課題があり、研究成果の地域還元が必要とされている。今後は同様の研究手法をもって一つ一つの地域の資料を分析していき、具体的かつ地域にとって無理のない民俗行事の継承方法を提案できるよう研究していきたい。また、研究成果についても、研究者の世界で公開して終わるものではなく、地域で展示を行なったり、使いやすい報告書を現地に納めたりするなど、地域還元を主眼に置いた研究者となっていきたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

本研究にご支援いただいたことで、資料調査に用いる機材の購入や、地域との情報共有を行う際の資料作成等を行なうことができました。これまで当該地域の研究は、研究者が出入りするだけで完結してしまうものが多く、地域への還元があまりなされてきませんでした。本奨励金による支援をいただいていることや、研究成果は地域にも還元されることが前提である旨を説明しながら調査を行うことで、地域住人から快く様々な資料を提供していただけました。

江包のお綱祭りは国の重要文化財に指定されていますが、江包・大西地域では人口減少が徐々に進んでおり、聞き取り調査でも運営を危ぶむ声がありました。こうした状況は他地域の民俗行事でも同様で、実際に廃絶した祭礼も少なくありません。今後は本研究の成果を踏まえて、他地域についても同様の手法を用いながら、さらなる研究の進展を図ってまいります。また、地域にとって具体的かつ無理のない民俗行事の継承方法の提案に繋がるような研究を展開していくことを目指しており、今回のご支援で、そのスタートを切ることができました。本研究の遂行にあたり、貴重なご支援をいただいたすべての皆様に、ここに記して感謝申し上げます。